

7.日本人の起源

日本人のルーツ探しは、明治以後、考古学・人類学・言語学など多方面から行われ、住居^{じゅうきょ}や神話^{しんわ}の類似性^{るいじせい}からポリネシア系の南方^{なんぽう}説、さまざまな文化の関連から中国南方説、古墳や埋蔵品の馬具などから北方^{きば}系の騎馬民族^{きばみんぞく}説、シベリアからの南下説などが言われてきた。第二次世界大戦後、特に近年になって、考古学的な発掘^{はくくつ}が進み、多数^{たうすう}の人骨^{じんこつ}や石器^{せっき}、遺物が見つかり、さらに分子人類学、遺伝子研究など新しい学問分野が参入することによって、より客観的な研究とデータが整い、他民族、他人種との比較^{ひかく}も容易^{ようい}になっている。

日本人の原型

日本では10万年以上前の人骨も発見されているが、現在の日本人の原型とされる人類は約1万8000年くらい前、日本にやってきたと見られている。この時代は、氷河期の最も寒かった時期に当たっており、海面が現在よりも140mほど下がっていたため、当時の食料であったマンモスを追って全地球^{ぜんちきゅう}的規模^{てききぼ}で民族移動が行われ、モンゴロイド^{ほんごくべい}が北米、南米にも渡った時期である。

日本周辺では間宮^{まみや}、宗谷^{そうや}、津軽^{つがる}、対馬^{つしま}の各海峡^{かくかいきょう}や黄海^{こうかい}、琉球列島^{りゅうきゅうれつとう}などが陸続きになり、

このため北方からは、寒い気候に適応した、顔の凹凸が少ない、身長も低い新モンゴロイドが、南方からは、アジア大陸南部に広く住んでいた丸顔の古モンゴロイドが渡ってきた。こ

の二つはやがて混交^{こんこう}して、やや新モンゴロイドの特徴が濃く古モンゴロイドの特徴も合わせ持つ「原日本人」が生み出された。身体的な特徴は、丸顔で、背が低い多毛性^{たもうせい}の人種である。

「原日本人」から現代日本人へ

「原日本人」は日本各地に住んでいたが、弥生時代から古墳時代にかけて、朝鮮半島^{ちようせんはんとう}や中国大陆から、細面で背の高いより進んだ技術と文明をもった民族が西日本に移住してきて、「原日本人」に文化的な影響を与えると同時に、しだいに広く移り住み、「原日本人」とも混交していき、現代日本人が生み出されていった。ただ、その波及が、北日本と南西諸島^{しよとう}に至るのが遅れたために、それらの地域には、日本人のプロトタイプのさまざまな特徴が残ることになったと見られている。

なお、現代の日本人を調べると、北には丸顔で背の低い人、南には細面で背の高い人が多いことがわかっている。

8. 日本文化の特性

内外の学者、研究者が挙げる日本文化の特性は多い。その中から代表的な4つを取り上げてみよう。

重層性

日本の文化は、系統の異なる文化が併存ないしは混在する重層文化である。例は周囲にいくらかでもある。政治には新旧の制度が混在し、衣食住は和洋折衷であり、宗教は神仏をともに受け入れ、日常使う日本語の中には漢語が半分以上も含まれている、といったぐあいである。

重層文化が生まれた理由として、日本人は異質文化への好奇心が強いこと、在来文化を根こそぎ否定するような侵略を受けず、必要に応じて外来文化を取り入れる環境にあったこと、などが挙げられる。

均一性

日本の文化は、地域によって、宗教によって、あるいは人によって異なるということはなく、ほぼ均一、均質であると言うことができる。どこを切っても同じ断面が現れる「金太郎あめ」というのがあるが、まさに日本の文化は金太郎あめと同じである。狭い国土に多数の人が住んでいることのほかに、日本人は長い間、生活の末端まで国家の統制を受けてきた経験から、個人よりも集団や国家を考える習性をもっていることが、文化の均一性を生んだ原因と見られる。

日本化

日本人は外来文化を日本化して、独自のものとしてしまう能力をもっている。平安時代に、漢字を日本化して仮名を作り出し、「源氏物語」などの傑作を生んだことは、日本の歴史 (p.14) で見たとおりである。

鎌倉仏教は仏教が日本化された例である。6 世紀に伝来した仏教は、鎌倉時代に法然とその弟子親鸞が出て、外来宗教の域を脱し、日本の仏教となった。法然は専修念仏の教え、親鸞は悪人正機説といった、日本人に即した独特の教義を説いて宗教活動を展開したため、広く民衆の信仰を集めることができたのである。

現実的

日本人は現実的である。普遍的概念よりも個別的な事物を重んじる。仏教を現世利益的なものに変えたこともそうだし、江戸時代の幕藩体制の理論的根拠となった儒学も、理論面より応用面、 実際面で優れていた。現代の科学でも、原理の追究より原理の応用・製品化の面で能力を発揮していることは周知のとおりである。

9. 日本人の宗教心

複雑な多神教国

日本人の宗教心は、世界でも最も複雑なものであることは間違いない。よく言われるのが、「正月には神社に初もうでに行き、春秋の彼岸には寺に墓参りし、クリスマスにはケーキを食べ、プレゼントする」という年中行事や、「七五三で神社にお参りし、結婚式は教会で挙げ、葬式はお寺で」という通過儀礼における宗教の多様性である。

ふつう、多神教と言え、一つの宗教が多数の神をもつことを指すが、日本の場合は、それぞれ体系化された多神教である仏教や神道があり、日本人の大部分はその両方の信徒で家には神棚も仏壇もあるうえ、時にはさらに、他の新宗教の信徒であることもありうる。加えて、お稲荷さん、道祖神といったアニミズムやシャーマニズムに近い神にも抵抗なく手を合わせる。自動車を買えばおはらいをしてもらい、超近代的な工場のロボットに人名をつけて擬人化した扱いをするのなども、アニミズム的信仰の表れと言ってよさそうだ。これを裏付けるのは、文化庁が編さんしている「宗教年鑑」である。1995年版によれば、日本の宗教人口は2億1983万人。総人口が約1億2000万人なので、日本人すべてがほぼ二つずつの宗教の信徒になっていることになる。

根底にある利益求心

このように、ある宗教に対する明確な信仰心はもたないが、心情として、あるいは基本的感覚として存在するのが日本人の宗教心と言えそうだ。その根本にあるのが、やはり日本人の自然観に基づく現実肯定の宗教的表現である、現世利益を求める心である。日本固有の民族信仰で

ある神道はもともと豊作や部族社会の安全を祈る祈願神であり、インドで発生したには自らの救いを得る宗教であった仏教も、日本伝来とともに祈禱する宗教となった。こうして日本では、宗教は商売繁盛、家内安全、受験合格、安産に至るまで、多種多様な現世利益を祈る場となっている。「苦しいときの神頼み」「いわしの頭も信心から」のことわざが、日本人の宗教心の現世利益という特色を物語っている。

近年、若者の間に神秘主義、オカルティズムへの関心が高まった結果、1980年代から超能力や超自然主義を掲げた多くの小宗教集団が生まれた。その一つであるオウム真理教が95年に東京の地下鉄で猛毒サリンによる大衆無差別テロを行った。オウム真理教が起こした別の刑事事件への牽制のためだったが、この事件は日本人の従来の宗教心に大きなマイナス要素として働き、宗教への警戒心が強まっている。

10. 日本人の労働意識

よく働く日本人

日本人は非常によく働くという評価は、日本の経済発展とともに今では国際的にも定着している。ただ、そうした評価の裏に日本に対する羨望と嫉妬が潜んでいることは、例えば日本の経済活動に対して「エコノミック・アニマル」と称していることでもわかる。しかし、日本人からすると、欧米の評価にはどこか認識の誤りがあるようだ。

日本人にとって働くということは、必ずしも利益を求めることが第一義的な目的ではなく、働くという行為そのものに価値を見いだしているという説がある。評論家の山本七平氏によれば、日本人の勤労というのは、すなわち仏教で言う成仏するための修行であり、経済的利益は宗教的に動機づけられた、つまり、私欲のない労働の結果とされる。このような、結果として得られる利潤は是認されると考えているというのである。現在の企業活動においても、この勤労に対する精神は生き続けており、それが、日本人が非常によく働くことの解答でもある。したがって、経済報酬は労働（時間）に対する対価であるという欧米的な勤労意識とは、その精神においてだいぶ異なることになる。この違いが、一方では契約社会に基づく企業経営を創出し、一方では独特のいわゆる日本的経営を生み出したと言う。

変わりつつある労働観

しかし、最近の仕事に対する考え方もだいぶ変化している。基本的に労働に対する価値を依然認めてはいるものの、意欲の点になるとかなり減少してきている。その背景としては、一つに

労働の目的の喪失がある。低成長時代になり、いくら働いたからといって収入は増えない。高齢化により、ポスト不足で出世も期待できない状況で、具体的な目標が立てにくい。

また一方、経済的に一応豊かになるとともに、価値観の多様化が進み、特に若い世代に働くこと以外の価値を認める傾向が強くなりつつある。そして、OA化やロボット化などが進むにつれ、熟練技術が単純労働に取って代わられたり、労働時間の短縮、余暇の増大などにより、従来の勤労そのものの条件も変わってくる。このことは、しだいに労働観の変化をもたらすだろうし、それにつれて当然勤労意欲というのも変わると思われる。少なくとも、今までのような企業中心的な勤労意欲というのは確実に減退していくであろう。